Osaka University Knowledge Archive

Title	多人数接触場面における社会的相互行為の諸相 : 参与における連携に着目して
Author(s)	藤浦, 五月
Citation	大阪大学, 2012, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59137
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【14】

氏　　名	藤　浦　五　月（ふじ うら さ つき）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学 位 記 番 号	第　２５００３　号
学位授与年月日	平成 24 年 3 月 22 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学 位 論 文 名	**多人数接触場面における社会的相互行為の諸相　ー参与における連携に着目してー**
論文審査委員	（主査） 教　授　西口　光一 （副査） 教　授　沖田　知子　　准教授　植田　晃次

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、ネイティブ・スピーカー（native speaker、以下NSとする）とノンネイティブ・スピーカー（non-native speaker、以下NNSとする）の日常会話を分析対象としている。本研究の目的は、多人数接触場面における参与連携の分析を通して、「NS－NNSであること」、「NS－NNS**以外**であること」がどのように構築されるのかを記述することである。これまでの接触場面研究では、参与者のふるまいの非対称性が、NSやNNSというカテゴリーで説明される傾向にあった。しかし、本研究は、接触場面の参与者を多様なカテゴリーを含む一個人として捉え、NS－NNSという関係だけでなくNSやNNSによらない関係がどのように構築されているかに注目した。参与者が何者として参与しているかという点は、従来、参与者の固定的な属性（国籍、性別など）と同一視されることが多かったが、本研究では発話ごとに更新され続ける動的なカテゴリーとして捉えている。このような発話の進行に伴い変化する関係性を捉えるために、本研究では、会話分析の立場に依拠して多人数接触場面の分析を行った。会話分析は、コミュニケーションとは参与者が互いに協働的に達成するものであるとし、人々が互いのやりとりを認識するために用いている様々な規則や秩序を記述することを研究目的としている。会話分析が明らかにしてきたコミュニケーションの微細な手続きと記述システムは、発話ごとに構築されることばの意味や参与者の関係を描き出すことができる。更に、そうした相互行為の手続きは、参与者が三人以上になるとより複雑化することが知られている。Sacks（1992）やLerner（1993）は、ある発話に誰が答えるかといったことや、ある物語をどのように聞くかなど、多人数会話におけるふるまいの差はある参与者同士を同じチームとして顕在化させることを指摘している。よって、多人数会話では、参与者のより多くの側面を分析できると思われるが、従来の接触場面本研究では二者間会話が取り上げられることが多く、多人数接触場面の多様な関係性については明らかにされていない。これに対し、本研究では、NS1名とNNS2名の三者間会話を分析対象とし、誰と誰が同じチームとしてふるまうのかを取り上げ、NS－NNSやNS－NNS以外の関係がどのように構築されるのかを示す。また、日本のどこかで日常的に構築されている関係性に迫るため、本研究では実際にプライベートで集まっている親しい友人同士に調査協力を依頼した。１つのグループは、NNS2名はいずれも日本語超級者であり、もう1つのグループは、初級程度1名・中級程度1名である（それぞれを超級者グループ・初中級者グループとして記すが、これは本研究が彼／彼女らを超級者・初中級者として扱うことを意味するわけではない）。録音・録画場面はいずれも彼／彼女らの部屋などで行われた。

具体的な分析内容と結果は以下の通りである。

（１）　参与における連携はどのグループに見られるか。

本研究では、超級者グループと初中級者グループの双方に多様な連携が確認された。この結果は、参与における連携や連携の組み換えが、日本語レベルに関わらず行われる現象であることを示している。この結果が更に示している

ことは、どこで発話するかというターンテイキングシステムは、コンテクストに依存しない性格を持っているということである。つまり日本語レベルや発話の内容に関係なく、隣接対や笑いによってもたらされるスペースでどのようにふるまうかによって、誰と同じメンバーであるかを呈示できるのである。

（2）　参与における連携はどのように顕在化しているか。

本研究では、連携を捉える指標の一つとして、「質問－応答」などの隣接ペアと、笑いの開始に注目した。まず、隣接ペアは、「質問」がなされると「応答」が期待されるような発話である。隣接ペアの第一部分（質問、勧誘など）に対し、第二部分（応答、受諾など）で誰が発話するかということに注目した。

隣接ペアの行為スペースにおける連携では、隣接ペアの組み合わせでは、交互に質問を重ねることで「質問する側－される側」という連携が確認された。また、①複数の話者が第二部分（応答）を同時に産出すること、②質問者が、複数の人物を第二部分（応答）を産出する人物として選択すること、③第一部分（質問など）の直後に、第三者が支持を差し挟むこと、④第二部分（応答）を向けられた人物以外の相手が応答すること、⑤第二部分（応答）の後の第三部分（応答に対する応答）を質問者ではない人物が行うという手続きが確認された。

笑いの開始による行為スペースでの連携は、①笑いの開始をほぼ同時に行う、②笑いの後に続けて笑うという手続きが確認された。特に、言い間違いやスリップが笑いの対象となる場面では「指摘する－される」という関係をからかいに転化することで、遊戯性を共有していた。また、ある日本語の表現が笑いの対象となっても、もう一人の NNS がその発話を対象として笑い「笑う側」としてふるまうことで、連携は NS－NNS として構築されていない様子が明らかになった。一方で、あることを共同で経験した人物は他の参与者に先んじて笑うことで自分の立場を呈示することもあり、笑いの位置だけではなく、会話外在的コンテクストに感応することで説明可能になるふるまいも確認された。

（3）　連携を可能にしているリソースは何か。

連携を可能にしているリソースは二種類ある。Schegloff（1992）によって区別された「会話内在的なコンテクスト」と「会話外在的なコンテクスト」である。会話内在的なコンテクストとは、会話内の発話と発話の連鎖組織や行為の連鎖を指すものである。どこでターンを取るか、誰の代わりに答えるかといったものである。一方で、会話外在的なコンテクストとは、従来の社会学や人類学などが扱ってきた参与者の持つ様々な属性（性別、年齢など）や、会話が行われている状況（教室や法廷など）である。多人数会話の次話者選択を分析した森本（2004）は、これまで会話分析が行ってきた会話内在的なコンテクストだけでなく、会話の状況や参与者の関係性、物理的な環境などの会話外在的なコンテクストも次話者選択のリソースになっていることを指摘している。

本研究においても、同様の結果が確認された。どこで笑うか、隣接対のどこでターンをとるかというような、会話内在的なコンテクストが、チームとしてふるまうリソースになっている一方で、会話内在的な分析だけでは、ある特定の参与者にはターンを取ることができ（あるいは笑い）、もう一人の参与者にはターンが取れない（笑えない）ということを説明可能にするには、参与者の関係性や物理的な環境なども分析に含める必要があったのである。例えば、ある発話が笑いの対象として呈示された際、一人の参与者にはわからないが、もう一人の参与者は事前に関連情報を知っていたために笑い始め、三人の中である経験を共有している人物だけが笑い合うという場面が確認された。更に、ルームシェアをしている超級者グループでは、食事の時間や冷蔵庫の中身に関する事柄は特定の人物に質問をするなど、ある事柄を習慣的に行っている人物が「質問される側」として顕在化していた。これらの結果は、コンテクストに非依存的であるターンテイキングシステムが、会話外在的なコンテクストも含めてその都度利用されているという森本（2004）の結果を支持している。この結果は同時に、参与者の関係性が、局所的なカテゴリーをその都度参照することによって成り立っており、男－女といった社会的類型のみでは捉えきれないことも示している。

最後に、本研究の結果と接触場面の研究について述べる。チームとして参与するリソースの一つとなっていた「料理をよく作る人物」や「ある経験を共有する人物」などは、私たちの何気ない生活に遍在しているものである。こうした局所的なリソースを相互行為のリソースとして用いることは、接触場面に限ったことではない。しかしながら、従来の接触場面研究ではこのような関係は注目されてこなかったのである。本研究の結果は、参与者の日々の何気ないやりとりを互いの連携のリソースとして捉えることを可能にするものであり、異文化間交流や共生を NS－NNS や日本人－外国人という枠組みで捉えている研究や活動に新たな視点を加えるものであると考えられる。

論文審査の結果の要旨

これまでの接触場面研究では参与者の振る舞いの非対称性をNS（母語話者）対NNS（非母語話者）のカテゴリーのみで説明する傾向があった。本論文では、そのようなNS対NNSという固定的なカテゴリーにのみ注目する従来の接触場面研究を接触場面の一面しか見ていないと問題視して、接触場面の参与者を多様なカテゴリーを内包する一個人として捉え、NS対NNSだけに限らない多種多様な関係性が接触場面でどのように構築されているかに注目した。そのような作業を行うために本論文では、これまでの接触場面相互行為研究で一般に調査対象とされる一対一の会話や初対面の会話ではなく、すでにプライベートな関係を築いている日本語NSと日本語NNSが混在するグループ（調査対象のグループはいずれもNSが１人でNNSが２人の３人グループとなっている）による多人数接触場面を調査対象とした。そして、分析方法としては、相互行為における関係性のカテゴリーの組み替えを記述するために、隣接ペアと笑いによってもたらされる行為スペースで参与における連携が多様に組織されていること捉えている。このような研究方法によって、本論文は接触場面相互行為においてNS対NNSという関係性を含みつつも多様な関係性が構築される様子を明るみに出すことに成功している。また、調査対象としてNNSが超級者のグループとNNSが初中級者のグループを設定することで、そうしたNS対NNSだけでない多様な関係性の構築が日本語力が必ずしも十分でない初中級者のグループでも起こっていることを示したことも高く評価できる。

また、第２章では、コードモデルのコミュニケーション観や抽象的客観主義の言語観の批判から議論を起こし、コミュニケーションの協働的構築（Jacoby and Ochs, 1995）の概念を提示し、日本における接触場面相互行為研究の課題を指摘した上で、会話分析の研究方法を概観しながら本研究で注目する参与における連携という現象を捕捉する手法を明確に提示している。必要な範囲の研究分野に十分に目配りをしながらそれらを巧みに関連づけて自身の研究方法の提示に結びつけている議論の展開は非常に優れている。そして、第４章と第５章のデータの分析では、それぞれの行為スペースで展開される相互行為を第２章で提示した分析方法に基づいて非常に丁寧に分析しそれぞれの参与における連携のあり方を説得的に提示している。

以上のように、本論文は、参与者が内包するさまざまなカテゴリーが相互行為においてリソースとして援用されて、NS対NNSにとどまらないさまざまな関係性がそこで構築されていることを実証的なデータに基づいて提示した初めての研究であり、接触場面相互行為研究の今後の発展に重要な貢献をする研究であると見ることができる。また、第２章の議論も、会話分析の手法を接触場面相互行為研究に適用する筋道を明らかにした点で高く評価できる。論文中で言及されている多文化共生の概念と本研究で明らかになったこととの関連づけの議論が少ない点や、一部注釈がやや不十分になっている点など周辺的な部分で若干の課題もあるが、本論文の価値をいささかも損なうものではない。

以上のように、本論文は博士号学位（言語文化学）論文として、十分に価値のあるものと認められる。